

2022年



# マナ通信



## 今月のマナ通信

- ◎5月の週日の聖書日課 (詩篇、ローマ人への手紙、他)
- ◎土曜日・日曜日の学び イエスの弟子たち からの感想です。

**千**恵子姉妹が天に召されました。和歌山県の日置で生まれ、海辺育ちでした。女5人の4番目で、穏やかな田舎の自然環境満点の中で育ち、結婚して東京の阿佐ヶ谷に居を移したのは姉妹にとっては羽根をもがれた小鳥のようだったのかも知れません。

次女を出産の後、時を置かず、精神の病に冒され精神病院のお世話になったのは、26才の頃でした。それが一生涯付き合うことになる統合失調症だったのです。病院もいくつか変わり入退院を繰り返しました。

その後、富士見市のみずほ台に移転し、そこでは、子供を通して数人のお母さんたちと知り合い、相手も姉妹が精神的な病気で苦しんでいると知った上で友だちとしての付き合いをして下さり、本人の生まれ持った気さくな性格も手伝って毎日を過ごすことが出来ました。薬は欠かすことは出来ませんでした。周りの人たちの暖かい助けがあって親子ともに生活を送ることができたことがありがたい事でした。

その後、みずほ台の家は次女夫婦が住み、我々が新所沢に引っ越したのが2006年頃だったと思います。しかし、統合失調症はついてまわり、当時、民生委員をされていた福島姉妹のおさそいにより、一人で教会に行くようになりましたが、長続きはせず教会に行かなくなりました。

統合失調症が激しくなり、すごい幻聴に悩まされ、夜も寝ることが出来ず大変な状態になったのは季節の変わり目4月のころでした。その時、千恵子姉妹はこう言ったのです。「福島兄弟に会いたい、会って話を聞きたい。」早速兄弟にお願いしたところ、快く引き受けて下さり、自宅に来て下さり、神様のこと、救いのこと、恵みの話をして下さいました。しかし、その後も幻聴は治まらず千恵子姉妹は入院を余儀なくされ4月・5月と病院で暮らし、6月に入ってから退院して来ました。入院生活の間、姉妹は聖書を病院に持って行き読んでいたのです。私は驚きました。そして、その旨を福島兄弟に知らせ、お願いして二人で教会に通うようになりました。

私は、兄弟の説教の中で、過去に犯してきた罪は全てリセットされる、と言う言葉を聞いて感動しました。人間には人に話せない、忘れようとしても忘れることが出来ない取り返しのつかない事があるものです。2009年に教会でバプテスマを授けてもらい千恵子姉妹にとっては二回目の教会生活が始まりました。薬は飲み続けていましたが、形として現れることなく、平穏な日々が続きました。

しかし、突如として試練が襲って来ました。それは隣の部屋に引っ越してきた男性が壁を屋と言わず夜と言わずドンドン叩くのです。しかし、不動産屋が契約の延長を許さず1年で出て行きましたが、私にとっても、千恵子姉妹にとっても生死にかかわる一大事でした。・・・

その頃、姉妹は膝に人工関節を入れ歩行が大変な状態でした。ケアマネジャーの計らいにより、シェアライフによる訪問介護を週に3回受けていました。

ローマ人への手紙の学びに入ってからは一生涯懸命予習をし、問いに対して答えようとしてます。日曜日が近づくと必ず答え合わせをしようとせがまれました。信仰に関しては私の上を行ってました。

シェアライフの人が訪問して来た時、姉妹はシェアライフの人にイエス様のことを語っていました。それのみならず病院でも、主の救いについて精神科の先生にも話をし、先生も「じーっと」聞き入り、「そうですね」と言って受け入れて下さいました。そして、自分も病気で不幸な人に自分の体験を話したいと言っていたのを思い出します。

しかし、夜中に壁をドンドン叩かれたのは、病気持ちの姉妹にとってはたまらなく苦痛だったと思われます。今回の入院も幻聴が激しく、原因のほとんどが壁を叩いた「吉田」がらみのものでした。

不思議なことに千恵子にとっては吉田が善人になっているのです。吉田の姉さん、子供が登場し、千恵子姉妹が自分の家に吉田の姉さんを招こうとしているのです。

あの憎き吉田を許したのか？ 私にとっては不思議でたまりません。多かれ少なかれ私にとっても後遺症があります。こんな事がありました。教会で突如、「吉田さんを教会に連れて来て良いですか？」と福島兄弟に問うたことを思い出します。千恵子姉妹は、口癖のように早く召されたいとしょっちゅう言っていました。

2022年5月27日、朝4時に病院から死亡の連絡が入り、長女と病院に駆けつけました。その後、次女も追っかけて病院に来ました。死体のベッドの枕元に聖書が置いてありました。

神様は地上での苦しみから千恵子姉妹を解放し、主のみもとに召して下さいました。(畑中伸之)

**し**かし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。」(ロマ3:21-22)

所沢の集会では2019年4月にロマ書3章21-22節を学び始め、今年2022年1月2日までロマ8章29-30節に至るまで続けて学んできました。

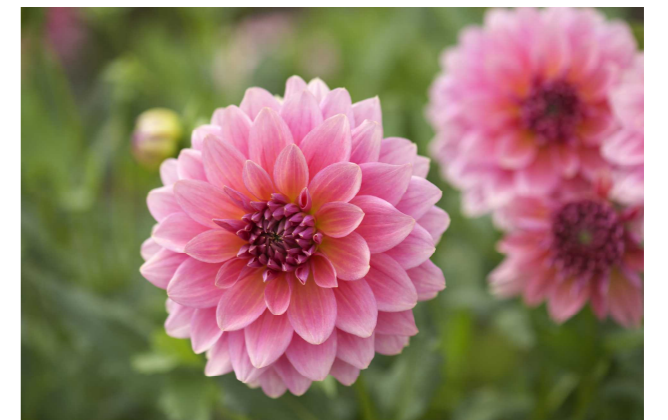
しかし、福島兄弟が、またロマ3章21-22に戻って再度学ぶ必要があるとして、4月10日にロマ3章21-22節を学びました。しかも、3章21-25節を賛美の替え歌にして、その理解を自分の全存在に行き渡らせようとのことのようにです。

私は黙っていても、心の中で過去に自分が語った言葉や行動のことで、良心の呵責や罪定めがやって来て、私を攻撃し憂うつにさせられるということがあり、そして、自分が口にする言葉で心がどこに立っているかが明らかにされます。

聖書の中の人々もキリスト者として、内にも外にも様々なサタンの攻撃に遭いながら、私たちに勝利の道を歩む秘訣を、また、その経験を教えてくれていると思うと、とても励まされます。

人はキリスト者になりたければ、自分に全く望みがないことを悟らなくてはなりません。キリスト信仰こそが、勝利の秘訣ですと繰り返し御言葉は語ってくれています。

イエス・キリストが私のために神の義を満たして下さいました。イエス・キリストを信じることによって、「信じるすべての人に恵みとして与えられる神の義」です。ですから、「しかし今や」と、いつも歌います。  
(福島三弥子)



**私**の住んでいる地は有名な神社が二つあります。町会費の中から当然のように玉串料を出しております。

信教の自由を侵していると思いますが、長年の慣習であり、黙認しております。別の教会の長老が同じ町内にいて、例大祭の役員に名前が書かれているので、いいのかなと思いますが。

主イエスがペテロに信仰告白をお求めになった地方ペリポ・カイザリアも異教的雰囲気満ちている土地だったと知り伝道が難しいことの、言い訳に使っていたことを、恥じています。時を生かして本物の神様の存在を、話していこうと思います。

自分が良いと認めていることで自分自身をさばかない人は幸いです。ロマ14章22節に、どういふことなのかと疑問を持ちました。日々のことには、自分で判断しなければならないことが沢山あります。

どちらを選んでも罪ではないことには、裁き合わないで、神の前に己を正しく持てることを、勧めるにとどめていると、榊原康夫師の解説にありました。自身が確信を持って選んだことは、よしとしましょう。他人の決定も尊重して、主にある一致を、求めていくことが大切なのですね。(広瀬裕子)



**あ**る本に以下のような文章がありました。

「バビロン捕囚からエルサレムに戻ったユダヤ人たちには、当面喜びとなるようなことは身の回りに何もなかった。神殿はまだ再建されていないし、あらゆる点で困難、試練、問題は山積していた。

今後の見通しも現況もかんばしいものではなく、期待が持てそうもなかった。しかし神は、喜び、祝い、幸せであれ、とお命じになった。なぜか。理由は、すでにエルサレムに戻ったからである。がれきの山であるとはいえエルサレムに戻ることは、バビロンの王宮にいるより良いことであった。

しかし、喜び、祝うべき、より一層明確な理由があった。未来に関しての明るく、輝かしい予測である。バビロンという自由のない状況から人々を開放なさった神は、最後に至るまで間違いなく彼らを守り、支えてくださると信頼できるお方であった。多くの敵に囲まれた中で、人々が自分自身に信頼し、自分の力に頼るだけなら、予測できるのは不気味で恐ろしい事態だけである。

しかし神が彼らとともに居てくださる。彼らを救いに導いた神は、守ってくださるお方である。神はこの人々に仰せられた。『現実は見えての通りだが、それでも喜べ、わたしがあなた方とともに居る。私に信頼せよ。自分たちの勝利を先取りして祝え。』

私もサタンの捕囚から解放されました。それでもいろいろな事態が起こって、アップダウンしています。この文章によって、今後はいろんな事態の中でも、神が私にお命じになったように、共に居てくださり、将来まで守ってくださる主に信頼し、先取りまでして喜び、祝って生活できそうです。感謝します。(高橋美枝)



**で**は、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。」

(ロマ3:9)

ユダヤ人も、ギリシア人も、私も、すべての人が罪の下にある。人間は自分で自分の罪をどうすることもできないという事実を、人間は受け入れることができません。何かごまかす方法をさがして自分を納得させたり、修行や努力で罪を打ち消そうとしたりします。

しかし、神様が要求する義の基準には到達することはできません。神様を度外視して自分で歩もうとすることが、罪そのものだからです。

パウロは選民意識の高かったユダヤ人たちに、ユダヤ人も罪の下にある、悔い改めて、なだめの供え物となられたイエス・キリストを信じることによって神の義が与えられる、と熱心に語りました。

すべての人が罪の下にあるというネガティブな事実から、信仰による罪の赦しという最高にポジティブな福音につながります。パウロほどの熱心さはなくても、福音を伝えていけたらと思います。

千恵子姉妹が天に召されたとお聞きした時、イエス様にいろいろと質問したり話しかけている千恵子姉妹がすぐに思い浮かびました。

最近のマナ通信の千恵子姉妹の感想を読み返して、千恵子姉妹はきっと人には分からない病気の苦しみを抱えながら、神様に頼って地上での生活をしてこられたのだなと思いました。

痛みも苦しみもない天国にいる千恵子姉妹に、私もいつか再会します。その日まで祈りを絶やさず歩んで行きたいです。(永井亮子)

**礼**はイエス様を信じて救われ、人生観が変わりました。聖書とは、全く縁がなかったわけではありません。身内にもクリスチャンがいましたし、高校生の頃、友人がクリスチャンで、私も興味本位で、カトリック教会に通いましたが、話をする友人はできませんでした。

それから教会へ行くことも遠ざかってしまいましたが、退職を機に住んでいたアパートの近くに教会と幼稚園が併設されていて、この教会の前を通るたびに、中から穏やかな声の聖歌・讃美歌を聞き、それから迷わず、教会の事務所に駆け込みました。「安らぎ」「平穩」を求めて。その時期、入会した人は

10人くらい。いつも行動は一緒でした。夜の礼拝にも誘って頂きました。

皆さんと勉強して行くうち、特にイエス・キリストの奇蹟について、多くの罪人のために、自ら犠牲になり、十字架にかけられ、死に、その三日目にしてよみがえったこと、当時、私は理解できませんでした。しかし、今、キリストの十字架の愛を知った以上、自堕落な生活をしているわけには行きません。

「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をしぐれた者として尊敬し合いなさい。勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい。」(ロマ12:9-12)

信仰を持つ以前なら、到底考えられないことであったと思います。今は、言葉を発する前に、まず「主よ」と自分に言い聞かせます。

「悪に流されることなく、善を行い続けられるよう、聖霊の力をお与え下さい。」 (木村邦夫)

**あ**なたは私を最も深い穴に置かれました。暗い所に 深い淵に。」(詩篇88:6)

“みことばを味わおう”より抜粋 すべての病気は治るわけではない。神様は病気を癒やす力をもっておられ、癒やして下さいます。しかしそれは、神様を信じる者は病気にならない、ということでも、クリスチャンは病気になっても全部癒やされる、ということでもないようです。

もしそうだったら、病気で亡くなった人は天国に行けない、ということになってしまいますから。ここには別の希望があるように思えました。どんなに重い病気の中からも神様に呼び求めることができるということ、そして必ずしも「癒やされる」「治る」ということだけがその答えではないことが。

畑中千恵子姉妹は、5月27日早朝、あわれみ深い救い主イエス・キリスト様のみもとに召されました。クリスマス会での主に在るお交わりをありがとうございました。私たちは、どんな状態にあっても神様に「祈れる」という希望があることを覚え感謝したいと思います(外處トミ)

気が付けば 5ヶ月が過ぎ 栗花落の日  
日々主とともに 御国を仰ぐ

2022年5月31日



群馬県安中市の「アイリスの丘」に咲いていたルピナス



**私**は、主イエスにあって知り、また確信している。それ自体、汚れているものは一つもない。ただ、それが汚れていると考える人にだけ、汚れているのである。」(ロマ14:14)

「病は気から」ということわざがあります。それ自体は悪いものではなくても、これは体によくないのではないか、危ないのではないかと不安に思ったり疑ったりすると、本当に具合が悪くなってしまふことが人間にはありますが、信仰においても同じであるようです。

神様が大丈夫、安心していいと仰っていても、自分が疑ってしまうと進むべき道を見失ってしまいかねません。いつも最善に導いてくださる愛なる神様を信じ、日々を歩んで行けたら幸いです。(外處光歩)

**す**なわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。」(ロマ3:22-24)

主は十字架の贖いによって、私の罪を赦してくださいました。感謝します。主を信じ、すべてを主にゆだねて歩んでいきたいです。(外處結実)

**し**かし、働きがない人であっても、不敬虔な者を義と認める方を信じる人には、その信仰が義と認められます。」(ロマ4:5)

何と感謝なことでしょう。キリスト者としてまだ未熟な私のような者であっても、主イエス様を救い主として信じる事ができる信仰を与えていただいたゆえに神様の御前に義とされ、いつか神様の御国に入れていただける計り知れない恵みをいただけたことは本当に幸いです。

私は、神様の前にまだ何の働きもできていないことに心狭く思うことが最近多くなってきました。定年後になれば時間にも余裕が出来て、主の為に何かできるのではと以前から思っていたのですが……思うようにはいかない日々です。

心の中で、証しの力としての御霊様をどうすればいただくことができるのか……などいろいろ考えるばかりで、なかなか力強い一歩が踏み出せないでおりましたが、この御言葉はそんな私に大きな慰めとなりました。

そして、全ての救いの恵みは主によって与えられることを改めて教えていただきました。ただ、神様の御愛の大きさに深い安らぎを覚えます。(外處徳昭)

**さ**ういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。2なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです。3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。4 それは、肉に従わず御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです。」(ロマ8:1-4)



60数年前、私がキリスト者になった当時、宣教師に「ロマ書はクリスチャン生活のための福音書だ」と教えられました。それで、沢山のロマ書の解説書を購入し、新約聖書の中で最も多くの時間を割いて学んできました。

特に、ロマ8章1-4節は、注解書や講解書で理解していたつもりでおりましたが、ロイドジョンズさんや尾山令仁さんの講解書を読んで、その理解が正しくなかったことを発見しました。私にとっては、言葉に表せないほどの大々発見でした。

まず1節に、「今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」とありま

すが、キリスト者になったと言えども、今なお罪深い生活をしている者が、どうして「罪に定められることは決してありません」と言えるのでしょうか。

ほとんどの解説書では、その理由として2節を使用し、「なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法が、罪と死の律法からあなたを解放したからです」と語られている聖句を、御霊の「聖化の働き」として説明されています。1節の「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」と言えるのは、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊の律法(力・法則)」が「罪と死の律法(法則)」から助け出し解放して下さるからだとの説明です。しかし、この解釈だと、「解放した」を「解放する」(現在形)として理解していることになりま



す。しかし、この解釈だと、「解放した」を「解放する」(現在形)として理解していることになりま

す。「解放した」のギリシャ語 ἐλευθερώω (エーレウセロー) は、「現在形」ではなく、「3人称単数アオリスト」です。ギリシャ語文法の「アオリスト」の意味は、ほとんど完了時制と同じですが、完了時制が現在の結果を強調しているのに対して、「アオリスト」は現在の結果を造り出したある過去の行為の、それが行われた時点が強調されています。その過去の行為とは「二千年前になされたカルバリの十字架上の主イエスの贖いのみわざ」です。

「いのちの御霊の律法」とは、恵みの原理(法則)です。2節の「罪と死の律法」は、7章14-25節で使用されている「罪と死の律法」と説明されている解説が多いのですが、2節の「罪と死の律法」とは「モーセの律法」を指します。

「モーセの律法」は読めば読むほど、私たち罪人に自分の罪を自覚させ死の宣告を与えるものです。しかし、律法は私たちに「罪定めと死の宣告」をもたらしただけでなく、「私たちにキリストに導く養育係」(ガラテヤ3:24)にもなりました。

感謝なことに、「キリスト・イエスにあるいのちの御霊」は、私たちに自分の罪を認めさせるだけでなく、二千年前にカルバリの十字架上で成し遂げられた主イエスの贖いのみわざを悟らせ、恵みを受け取る信仰を与えて下さいます。

このように2節を「聖化」ではなく、「義認」と理解することには、3節とのつながりにおいても、よくわかります。

3節も、原文ではその最初に「というのは」(Γάρ (ガル)) という意味の接続詞があって、2節の理由として、次のように説明しています。「(というのは) 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉(キリストの肉体)において罪を処罰されたのです。」

その結果、私たちは自分の罪深さ・弱さを見る以上に、カルバリの十字架の贖いが完全であったことを理解し、確信と平安と喜びを得るのです。

今なお聖化の過程にある私たちは、①肉(墮落した人間性)、②この世、③悪魔といった敵に対して弱さを覚えることが多々ありますが、十字架を見上げる時、感謝なことに、確信はゆらぎません。

「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません」と、カルバリの十字架上の贖いのみわざを裏付けとして、声を大にして宣言することができるのです。なんと感謝なことでしょう。「われは誇らん、ただ十字架を。あまつ御国に入る時まで。」(福島勲)

貴重なご感想ありがとうございました。

次回はマナ6月号の感想を7月10日までに福島兄弟へお寄せください。(畑中)